

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・
第6次調査(2022年)—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院教授
山田 重郎 筑波大学人文社会系教授
沼本 宏俊 国士館大学体育学部教授
サーミー・ジャミール クルディスタン地域政府スレーマニー文化財局職員
ラワ・サーレフ クルディスタン地域政府スレーマニー文化財局職員
ハーシム・ハマー・アブドゥッラー スレーマニー博物館館長

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire: Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, Results of the 2022 Season

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University
YAMADA, Shigeo Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
NUMOTO, Hiroto Professor, Faculty of Physical Education, Kokushikan University
JAMIL, Sami Staff, Slemani Directorate of Antiquities, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq
SALEH, Rawa Staff, Slemani Directorate of Antiquities, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq
ABDULLAH, Hashim Hama Director, Slemani Museum, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

1. はじめに

Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) は、2016 年以来、イラク共和国クルディスタン地域スレーマニー(スレイマニーヤ)県南部のシャフリゾール平原に位置するヤシン・テペ遺跡とその周辺を対象として考古学調査を実施している。2022 年は、コロナ禍もだいぶ落ち着き、本格的なフィールド調査を各方面のサポートを受けながら実施することができた。ここでは、3 年ぶりの発掘調査の成果を報告する。調査期間は、2022 年 8 月 6 日から 9 月 24 日であった。

今回の調査の目的は、第一に「下の町」南東部において 2018 年に実施した地下探査の成果からアノマリーを選択し、その実態を解明することと、第二にアクロポリスの年代について試掘調査を開始することであった。すなわち合計 3 か所で発掘調査を展開した(図 1~2)。

第一の目的には、二つの場所を選択した。まず F 地区(Operation F : 10×15 m) は、2016 年に調査を開始した A 地区で出土したようなレンガ墓に類似した四角形のアノマリーがあったため、別のレンガ墓の可能性を検証するために設定した。一方、その北西に位置する G 地区(Operation G : 30×20 m) は、「下の町」を流れる水路に隣接する建造物が密集したようなアノ

マリーが観察されたため、その実態を解明するために設定した。G 地区は、今シーズンで最も広範囲に調査を実施した地区である。

第二の目的については、今回初めてアクロポリスの南東部にステップトレンチを設定した。H 地区(Operation H : 2.5×15 m) である。アクロポリスは、これまでアメリカ隊やイラク隊の調査からイスラーム時代の厚い堆積があることが判明している。しかし、それ以前の堆積層についての情報はまったくない状況である。ドイツ隊と YAP の表面採集や YAP の「下の町」の発掘調査などによりウバイド・ウルク期の存在は推定されているが、堆積層の同定には至っていない。そこで、イスラーム時代以前の堆積層が存在すると考えられるアクロポリスの下方に焦点をあてて、「下の町」のこれまでの調査区に近い部分にトレンチを設定することにした。これは将来的に、「下の町」で検出した鉄器時代の層との相互関係を探ることを見通してのことである。

また今回は、専門家による調査として、1) 衛星データを利用したヤシン・テペ遺跡周辺の考古学踏査ならびに測量用ベンチマークの設定(渡部展也氏担当)、2) 出土人骨の調査(宮内優子氏担当)、3) 青銅製品を中心とした出土遺物の保存修復作業(西村明子氏担当)を実施した。

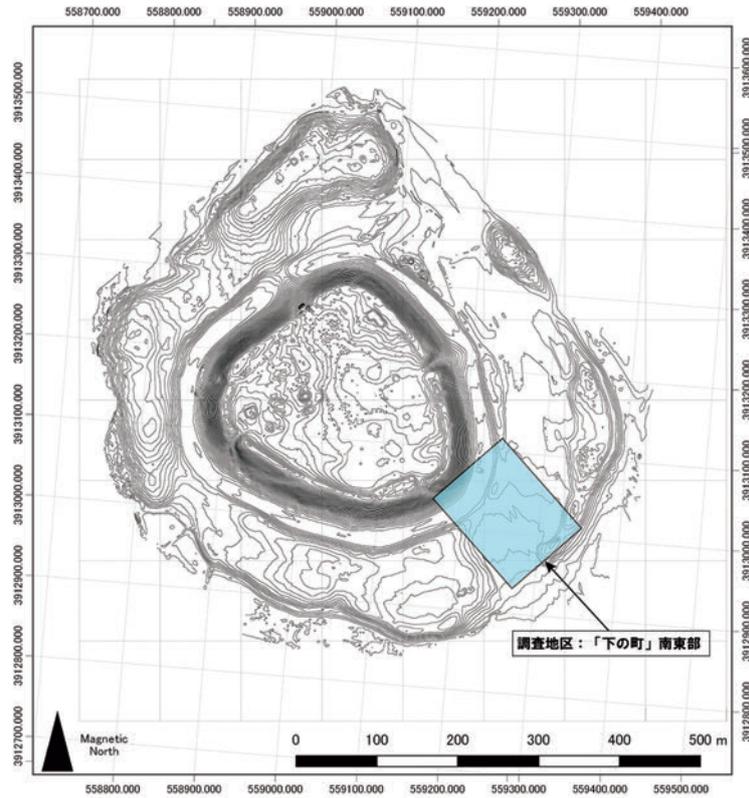


図1 ヤシン・テベ遺跡全体図と調査地区:「下の町」南東部。



図2 「下の町」南東部と調査区の位置(UAVによる撮影)。

2. F地区

F地区は、前述のように大型の四角形をしたアノマリーを検証する目的で掘り下げた。表土層直下からは、鉄器時代の層がすぐに現れた。特に調査区の西方においてはいち早く鉄器時代II期の層が検出された。一方、トレンチの東方では、ポスト鉄器時代(前6世紀

以降)の層が鉄器時代の上に堆積しているのが明らかになった。

残念ながらこの調査区では、四角形のアノマリーを検証するまで調査期間中に掘り下げることができなかった。その代わりに、この調査区で出土したのは、鉄器時代としては珍しい、「子供」が埋葬された墓地であった(図3)。

検出された子供の墓は、多くの場合、貯蔵用甕や大



図3 F地区全景：右手が北(UAVによる撮影)。

小のボウルや壺、クッキング・ポットなどに埋葬されていた。子供の年齢は、新生児から18歳前後の未成年と幅広かった。最も若い骨格は、約9カ月の新生児であり、縦長の壺の中に埋葬されていた。これらの墓のいくつかには遺体のある土器の少し上に数個の石が配置されており、おそらくこれらの石は墓の場所を示す「墓標」のような役割を果たしていたのかもしれない。

最も興味深いのは、推定年齢4~5歳(±1.5歳)の幼児の埋葬であった(図4)。この幼児の頭骨の上には、小型のボウルがかぶせてあった。また胸部から大腿部にかけてとその周辺では60点以上のビーズ(カーネリアン、ファイアンス、メノウなど)、アミュレット、カーネリアン製の円筒印章が発見された。また、幼児の下腿部には、左右それぞれ4本と3本の青銅製アンクレットが装着されており、両前腕にも青銅製腕輪が一本ずつ着けられていた。他の子供の墓では、わずかなビーズやイヤリングなどの副葬品が極めて少なかったことを考えると、この幼児の墓は、副葬品が異常に多く、高い社会的地位に属する家族の一員であったことが推測できる。

また、トレンチの東側では、ポスト鉄器時代と考えられる墓も出土した。土器などの形態がイラン系文化の強い影響下にあり、30 cmほどの長さをもつ鉄製短刀が副葬されていた。F地区の墓地が、比較的長く使用されていたことを示唆する証拠の一つとなるだろう。

調査期間の終盤には、上記の墓の南側で鉄器時代の大甕が垂直に埋め込まれているのを発見した(図5)。甕の上層部には、石が円形に配置されており、墓ではないかと思われたが、甕の中の土壌からは、副葬品や骨などは一切発見できなかった。この甕の意味するところは次シーズン以降の調査で明らかにしてゆきたい。



図4 F地区で発見された副葬品が突出して多い幼児埋葬：頭骨に小型のボウルがかぶせてある(写真右手)。



図5 F地区東部で出土した大甕。

3. G地区

G地区は、2018年の地下探査で複雑なアノマリーが確認でき、その南東には、北東から南西にかけて運河が走っていた場所である。今シーズンの調査では、発掘成果と地下探査の成果が食い違うことが確認できた。建造物が密集していることは確かであるが、その配置や壁の方向などについて地下探査では明確にとらえることはできていない。

この地区でも、F地区と同じく鉄器時代II期の建造物が、表土層直下で検出できた。当初の予想どおり、「下の町」東部の広い範囲が同じような堆積であり、鉄器時代以降の堆積(特にイスラーム時代)を考慮することなく、表土層直下から鉄器時代に到達できることを示している。

この地区で発見された建造物は大きく三つのグループに分類することができる(図6)。第一のグループは、調査区の北東部で検出された少なくとも異なる2時期に構築された二つの建造物である。これらは、規模や



図6 G地区全景：右手が北(UAVによる撮影)。

構造からすると一般の住居ではないことは明白であり、どちらも同じような構造をもっている。すなわち、三方が幅約90cmの石組壁で囲まれ、短辺の一方が開放されている。ここにドアや入口部などの構造物が発見されれば、メソポタミアから北レヴァント地方で類例がある「神殿(temple)」あるいは「祠(shrine)」ということもできるが、ヤシン・テベの事例は、入口部の構造をもたず、単に壁がないオープンな空間となっている。古い時代の建造物(Building A)には、最奥に破損したレンガを組み込んだ壁が位置する。また構造物の床面には、中央部上層に石敷き床が見られた。

上記の構造物と垂直に交わるように新しい建造物(Building B)がその南西に建てられていた。規模は、Building Aより若干小規模となり、奥壁の手前には石敷き床をもつ。Building Aが入口を北東にもつに対し、Building Bは南東に入口をもっている。これら二つの構造物が一般住居ではない特殊な役割をもっていたと考えられるが、それが世俗か宗教的なものかは、出土遺物の分析も併せて今後考察してゆきたい。

第二のグループは、調査区の西部で発見された、大型の石敷きの中庭(Courtyard)である。石敷き面は、さらに西方に続いており、規模的には、A地区で2016年・2017年に検出されたエリート層の邸宅で発見された中庭と同じかそれ以上の大きさをもつ。中庭の東部には、直径1.7mほどの円形ピットがあり、そこから水路が南東方向に延びている。この水路は、おそらく「下の町」を走る運河に接続し、中庭に集まる雨水を排水する役割をもっていたと考えられる。

この中庭には、北側、東側、南側に部屋が配置されており、北側のものは複数回の複雑な建て替えの痕跡が検出されている。この部分からは、ヤシン・テベで



図7 G地区・石敷きの中庭の北部にある建造物より出土した人物土偶(側面)。

は初となる人物土偶の頭部が出土している(図7)。この土偶は、頭部と胴部を入子状に接合するようになっている。独特のヘアースタイルとシンプルな顔の作りを持っており、アッシリアの王室レリーフにみられる宦官のヘアースタイルに類例がみられる。またイラン系文化の影響も推測できることから、今後類例を調査してゆきたい。

第三のグループは、調査区の南部で検出された建造物群である。この部分の建造物は、上記の第一、第二グループの建造物と比較すると断片的であり、建造物の配置を読み取るのが難しい。興味深いのは、いくつかの水路が検出されており、そのうちの一つは、上述した石敷きの中庭から延びる水路と接続している。水路の中には、川原石で水路が構築され、その上に焼成レンガで蓋をした「暗渠」も検出した。また、調査区の南端では、第一のグループで言及した建造物と類似した構造をもつ三方を壁に囲まれた建造物出土した。ただ、規模は第一のグループのものよりもずっと小型であった。

G地区では、F地区とは対照的に成人の墓が複数見つかつた。いずれも構造物が破棄された後に壁のそばや壁に囲まれた空間内に埋葬されている。これはA地区で、エリート層の邸宅が破棄された後、中庭や建造物の内部に埋葬が発見されたのと類似している。ただ、二つの墓からは1体の成人骨格と、別人の一部の骨格(あるいは頭骨のみ)が埋葬されるという興味深い事例が見られた。今後の人骨研究に期待したい。



図8 H地区のステップトレンチ全景(南より)。

4. H地区

ヤシン・テベの中心に位置するアクロポリスは、前述したようにアメリカ隊やイラク隊が主にその北部で発掘を行ってきたが、いずれもイスラム時代の層を検出しただけで、その下の居住層については明らかになっていない。そこで、アクロポリスの南部にステップトレンチを設定し、マウンドの下の部分より調査を開始した(図8)。

私たちの予測は、マウンドの上方は、イスラム時代の厚い堆積があり、それ以前の時代は、マウンドの中腹より下方に位置しているというものであった。しかし、ステップトレンチを入れてみると、一番上段のステップの最下層で検出したのは、前5千年紀のウバイド期もしくはさらに遡るハッスーナ・サーマッラー期に相当する層であることが推測された。またウバイド期と思われる層からは石組みの壁も発見されている。この年代の同定が正しいとすると、鉄器時代はさらにマウンドの上方に位置し、アクロポリスの南部ではイスラム時代の堆積層が北部よりも薄い可能性がある。

またこの成果は、ヤシン・テベのアクロポリスの起源がウバイド期よりさらに古く遡ることを初めて明らかにした。これまで「下の町」の表面採集では、新石

器時代の石器が発見されたり、鉄器時代の層にウルク期の土器片などが混じったりしていた。しかし、アクロポリスの発掘調査によって古い時代に遡ることが明確になったことは重要であり、今後このステップトレンチを拡張して、ヤシン・テベの「文化編年」を明らかにすることで、より大きなシャフリゾール平原の考古学的編年に貢献できるものと考えられる。

5. その他の調査

まず衛星データを利用したヤシン・テベ遺跡周辺の考古学踏査について報告する。すでに2021年度には衛星データ(高分解能衛星画像およびAW3D高精細版DSM)を利用した周辺の考古学踏査を開始しているが、今年度はその継続調査を実施した。特にヤシン・テベ遺跡の西方において新たな遺跡が3件発見された。またタンジェロ川南岸においても3件の遺跡が確認できた。いずれも衛星データで影のような痕跡として見えていた部分である。昨年度に引き続き、ヤシン・テベ遺跡周辺では、衛星データから高い確率で小規模な遺跡(1ha未満)が発見できることが判明した。またヤシン・テベ近郊では、鉄器時代の文化層を含む遺跡が多く、タンジェロ川南岸でも1件の鉄器時代遺跡が発見された。これらの遺跡はいずれもこれまで未発見の遺跡である。

一方、人骨調査では、2016年、2019年および2022年に出土した人骨の分析を行った。まだ調査は途中ではあるが、前述したように2022年の人骨はF地区のものがほとんど未成人、G地区のものは圧倒的に成人という区分がみられる。2019年にE地区で発見した二つの集団墓から大量に出土した人骨については、まだ未分析のものが多数あるが、若干の未成人を含むものの大半は成人(男性)の骨格あることが判明しつつある。また2016年の土壙墓(Graves 6 & 7)から出土した人骨は、未成人(10代前半)のものであると同定できた。ヤシン・テベ遺跡に居住していた鉄器時代の人口構成を考える上で、重要な成果である。今後の人骨調査に期待したい。

さらに将来の博物館での展示を目的とした出土遺物の保存修復作業が実施された。青銅製品が主な対象であった。中でも2017年にレンガ墓から出土した青銅製のソーサ・ランプに多くの時間を費やした。今後適切な補強措置を施し、博物館での展示を目指したい。また、ヤシン・テベ遺跡出土の土器(片)は石灰質の外被で覆われている場合が多く、土器の観察や修復に支障をきたすことがある。これについても石灰質の外被を除去する方法を実験的に検証した。

最後に、出土した炭化物、人骨、動物遺体(貝類、脊椎動物)、土器片、植物遺体、スラグ類などを分析資料として現地当局の許可のもと日本に持ち帰ることができた。今後、これらを順次分析してゆく予定である。

6. まとめと展望

2022年度は、2019年以來、3年ぶりの発掘調査を実施することができた。実施にあたっては、コロナ禍が現地で早く収まり、日本の出入国が緩和されことも大きな要因であったが、なによりも現地当局や日本の所属機関のサポートが大きかったことはいままでのない。海外調査の困難さと日ごろからのコミュニケーションが大切であることを改めて実感した。

さて、今年度は、2019年にすでに計画していたことを実地に移すことができた。すなわち2018年の地下探査の成果を実際の発掘によって検証するということである。またアクロポリスの調査により遺跡の文化編年を構築するというプロジェクトも始動した。前者については、地下探査の成果をある意味「裏切る」こととなり、新たな課題を突き付けられたといえよう。「下の町」の南東部がどのような都市構造をしていたのかがようやくおぼろげながら見えてきたが、今後とも調査を継続することで、より明らかにしてゆきたい。

今後は、さらに鉄器時代の「下の町」が埋蔵されている東部全体を視野に入れ、ヤシン・テペ遺跡の都市構造ならびに都市景観の復元について研究を進めていければと思う。

本プロジェクトは日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)「境界域に着目した古代西アジア帝国の支配形態と構造解明を目指す歴史考古学的研究」(代表:西山伸一)(課題番号20H01328)、萌芽研究「考古学・地理情報科学の融合からみる文化財の新たな記録システム構築に向けた研究」(代表:西山伸一)(課題番号21K18384)、基盤研究(B)(海外学術)「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」(代表:沼本宏俊)(課題番号18H00743)、および新学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質」計画研究A02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」(代表:山田重郎)(課題番号18H05445)の支援を受けた。

また共著者以外では、渡部展也(中部大学)、黒澤正紀(筑波大学)、池端慶(筑波大学)Jeanine Abdul Massih(レバノン大学)、Mouhamad Abdel Sater(レバノン大学)、Wilma Hanna(レバノン大学)、Ziad Jalbout(レバノン大

学)、Nehme Abu Rjeily(レバノン大学)、Yara Helou(レバノン大学)、西村明子(フリーランス保存修復家)、宮内優子(キプロス研究所)などのYAP構成メンバーの協力により調査が実施できたことを深く感謝申し上げます。

今回は調査中に米田元所長をはじめとするJICAイラク事務所、およびJICS(日本国際協力システム)の訪問をうけました。猛暑の中での遺跡訪問に感謝申し上げます。

また、いつもと変わらぬ全面的サポートをいただいているHussein Hama Gareib スレーマニー文化財局局長、Kamal Rasheed Raheem 前局長をはじめスレーマニー文化財局や博物館職員の方々にも厚く御礼申し上げます。

■参考文献

- ・ Nishiyama, S. 2020 Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire: A view from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 45-72. Wiesbaden: Harrassowitz.
- ・ Yamada, S. 2020 The conquest and reorganization of the land of Zamua/Mazamua in the Assyrian Empire. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 167-193. Wiesbaden: Harrassowitz.
- ・ Yasin Tepe Archaeological Project (Japan). 2022 *Yasin Tepe Archaeological Project (YAP): Field Report of the 2022 Season, Slemani, Iraqi Kurdistan* (Submitted to the Slemani Directorate of Antiquities, October 2022).
- ・ 西山伸一・常木晃・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・沼本宏俊・山田重郎・渡部展也 2017 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第1次(2016年)－」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』16-20頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・常木晃・山田重郎・沼本宏俊 2018 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第2次(2017年)－」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』17-21頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊・常木晃 2019 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第3次(2018年)－」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』109-113頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2020 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第4次(2019年)－」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』21-25頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2021 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2020年の進展－」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』20-25頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマール・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2022 「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2021年度の成果－」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』43-48頁 日本西アジア考古学会。